

第16回 堀川の流れは見えず（承前）

西本願寺唐門、竜谷大学大宮学舎

次にめぐるのは、本シリーズ第14回で残った西本願寺の北小路に面した部分です。堀川通に面した北小路門が開いていれば、そこから。もしも開いていない場合は、七条通を猪熊通まで西に入ったところに門がありますのでそこからゆけます。

まずは、国宝西本願寺唐門。安土桃山時代、伏見城の遺構。松皮しらかわ葺ぶき、唐破風の四脚門。豪奢な彫刻に日の暮れるのを忘れることから、「日暮門」とも呼ばれています。豪奢の彫刻は当初からのものではなく、寛永年間に修復したときに飾りをつけたといわれています。寛永年間に造営された日光の東照宮にも日暮門（陽明門）があるので、「その向こうを張ったのでは」と考えるのは下衆のかんぐり。写真は北小路側から撮ったもの。境内に入るには、北小路通に面したさらに西側、台所門から。今は御影堂の修復工事中なので、堀川通からは回れません。

唐門から西へ歩いたところに、竜谷大学「龍谷大学」の大宮キャンパス（七条通大宮東入大工町）があります。西本願寺の学寮（寛永十六年（一六三九年）創立。のち学林に改称）が始まり。本館、北翼、南翼、正門、および守衛所が、建設当初（明治十二年（一八七九年））からの建物で重要文化財。



仁丹町名看板の所在（七条堀川の西南）

西本願寺は、幕末のどんどん焼にも類焼しなかったため、貴重な資料が残っています。極めつけは、竜谷大学大宮図書館にある国宝「類聚古集」。「万葉集」を短歌、長歌に分けて、万葉がなの本文と平がなの訓を併記したもので、平安末期、藤原敦隆あつたか編。二〇〇一年、古典籍デジタルアーカイブ研究センターを開設して、収集品（大谷探検隊の収集品が有名）や蔵書の保存やデジタル化に力を入れているようなので、その成果を期待しております。個人的には、「龍谷大学電子図書館」の貴重書画像データベース (<http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/top.html>) が目の保養



西本願寺唐門



竜谷大学大宮学舎（本館）

になります。宗門の大学のイメージが強いので、宗教や文学に関するものばかりかとおもっていましたが、アーカイブの中に『舎蜜開宗』の影印が含まれていたのには驚きました（わたしの本業は有機化学なので）。

興正寺

西本願寺の南隣は、興正寺です。真宗興正派本山。蓮如上人に帰依した経豪（のちの蓮教上人）が、仏光寺（本シリーズ第10回参照）から分かれて、山科に「興正寺」をおこしました。西本願

寺とともに大坂に移ったのち、豊臣秀吉の京都改造の折、天正十九年（一五九一年）に現在地に移りました。この地はもともと、平安京の東市にあたり、市姫神社や時宗市屋派の金光寺があったところ（本シリーズ第12回参照）。江戸時代を通じて、興正寺は西本願寺の脇門跡であったが、明治九年（一八七六年）に一派をおこし独立。現在の建物は、明治四五年（一九一二年）に再建したものである。

七条堀川の十字路の西北に、興正寺宿坊興正会館があります。この宿坊のホームページでは、公式所在地は「醒ヶ井通七条上ル華園町（通称、七条通堀川上ル）」としています。これは、このあたりでは、醒ヶ井通が堀川通を代用していたことの名残です。つまり、西本願寺や興正寺の堀（これが堀川）を隔てた門前の通りは、堀川通の拡幅より以前は、堀川通ではなく醒ヶ井通であったというわけです。

さらに、「西本願寺・興正寺の門前は堀川通ではなく醒ヶ井通であったこと」の傍証は、『京町鑑』からも得られます。『京町鑑』では、「堀川通」を「東堀川之分」と「西堀川之分」とにわけて説明しています。「東堀川之分」の末尾に、「此町南の辻萬壽寺通にて行當、切半町ほど東醒井へ出る也」とあります。「西堀川之分」の末尾は、「此南本園寺入り口也。則行當」となっています。さらに、『京町鑑』の「醒井通」の項の末尾は、「北小路下ル西側は興正寺御門跡。東側端之坊西光寺性應寺。此町の南の辻は七条通也」と記載されています。端の坊など（拡幅したときに存続していたかどうかは未調査）があった旧醒ヶ井通と旧西中筋通の間を取り払い、拡幅した通りを、現在は、堀川通と称しているわけ

です。この拡幅は、太平洋戦争のときに南北の防火帯を作るためであったと推測されますが、疎開させられた住民はたまったものではなかったでしょうね。

梅ヶ枝の手水鉢

京都には伝説による旧跡がたくさんあります。源氏物語などのフィクションなのにその登場人物に関する墓や碑があったり、源義経のような歴史上の人物であっても、伝説化したためにもっともらしい架空の旧跡が残っている場合もあります。虚実ない交ぜにしたこれらの旧跡は、いかにも京都らしくておもしろい。本シリーズでは、このような「伝説による旧跡」も積極的にとりあげています。ここに紹介する「梅ヶ枝の手水鉢」もその一つ。

七条堀川の交差点の西南隅の歩道に植え込みがあります。この植え込みの延長上、北を見ると、そこは興正寺の門前は堀（堀川）です。つまり植え込みの下は、堀川が暗渠になった水路です。植え込みの南の延長上、下魚棚通と交差するところから、斜めに西南方向に延びる細い通路があります。ここが堀川のもとの水路です。あわれなことに堀川は、ここからはるか南まで（近鉄京都線「上鳥羽口」駅付近まで）暗渠になってしまいました。この堀川の旧水路が木津屋橋通と交わる、五叉路のすぐ手前の植え込みの中に、「梅ヶ枝の手水鉢」（木津屋橋通西堀川東入鎌屋町）。写真のあるとおり、説明板はほとんど読めない状態なので、知らなければ通りすぎてしまいます。

歌舞伎『ひらがな盛衰記』四段目、「傾城無間鐘」。梶原源太景



梅ヶ枝の手水鉢

季は、三百両のかたに鎧兜を質に入れています。いよいよ一の谷の合戦に出陣のために必要なのに、受けたす金がない。景季の妻千鳥は傾城梅ヶ枝となっていますが、夫のためなんとか金を工面したい一心で、庭の手水鉢を無間鐘に見立てて叩きます。すると、三百両の金が天から降ってくるという筋。無間鐘とは叩くと現世では富をつることができるが来世では無間地獄に落ちるといふ言い伝えがあります。『源平盛衰記』をもじった物語ですが、正直なところ、結構荒唐無稽な筋ですね。

仮名垣魯文の作と伝わる「梅ヶ枝節」は、この物語を端唄にしたもの。「梅ヶ枝の手水鉢、叩いてお金がでるならば、もしもお金が出たときは、その時や身請けを、そつれたのむ。」この手水



木津屋橋通 堀川 西入 川端町②

鉢が、なぜか、ここにあるのです。

西堀川通の「梅ヶ枝の手水鉢」の向かいに町名看板「木津屋橋通堀川西入川端町」②があります。この看板は本来なら木津屋橋通に面して貼つてあるはずだが、いまは西堀川通に面して貼つてあります。町名看板②では、南北の通りが堀川通となつていますが、これは現在の西堀川通を差し、現況（拡張後）の堀川通ではないと推測されます。

堀川が暗渠になつていないときには、この付近に木津屋橋が架つていたはずです。『京町鑑』では、「生酢屋町」の項があり、「東組西組二町に分る也。右堀川の流に橋有。月見橋という。則生酢屋橋也」と説明されています。木津屋橋（生酢屋橋）に月見橋という別名があつたことがわかります。

芹根水

西堀川通を南下すると、元の安寧小学校の裏堀沿いの一角に、芹根水の碑（木津屋橋通堀川西入下ル東側、西堀川通木津屋橋下

ル東側）が建っています。この碑は、書家松下烏石が宝暦年間（一七五一―一七六四）に建てました。昭和五七年（一九八二年）の堀川暗渠工事の際に掘り出されて現在の地に移されました。芹根水の碑の傍らには、文房四神之碑。筆（南）、硯（東）、紙（西）、墨（北）を四方の神に見たてたもので、これも松下烏石の手。



芹根水の碑



文房四神之碑

『都名所図会』巻之二の「芹根水」の項には、

芹根水は堀川通木津屋橋の南にあり。近年書家烏石葛辰、清水を井筒に入れて、傍には芹根水の銘みづから八分字に書して石面に彫刻す、また公卿の詩歌を集む。

（後略）

と説明されています。文中、「八分」とは、篆書と隸書の間の中間の書体です。



『都名所図会』巻之一月見橋・芹根水の図
 (国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」よ
 り引用)

書家松下烏石(一六九九〜一七七九)について、『平安人物志』
 明和五年(一七六八年)版には次のように記載されています。

葛 辰 字神力号烏石
 下魚欄堀川角

松下烏石

素行は芳しくなかつたと伝えられていますが、能書家として知ら
 れ、晩年は西本願寺門主の賓客として書道の師匠におさまってい
 ました。上の引用の(後略)の部分には、集めた詩歌の序文が
 長文で載っていますが、その中で「芹根水が源融の第宅の用水で
 あった」というような、少し調べれば誤りであるようなことを
 麗々しく書いています。書の腕はともかく、烏石の山師的な素顔
 がうかがえます。

『都名所図会』巻之一には、「月見橋・芹根水」の図が載って
 いますので、引用します。川の流れの様子から見て、右手が上流
 で、そこに月見橋が架っています。図には、「堀川の南生酢屋橋よ
 りひがしの山をみれば、信濃国更科郡鏡臺山に似たりとて、世
 の人月見橋といひならわし侍る。」という贅が添えられています。

「月見橋・芹根水の図」でわかるように、水量が豊富な堀川
 は、今日の暗渠の風景と比べて、段違いに好ましい景観です。暗
 渠にした効果があるのならともかく、堀川暗渠の道路は、まれに
 自動車を通るくらい。昭和五七年(一九八二年)の時点で、堀川
 を暗渠にした意図がよくわからない。もはや、自動車中心の道路
 行政は考え直すときがきたようです。今からでもよいから、七条
 通から南の暗渠を掘り直して、堀川の清流を復活させるほうが、
 観光都市京都としてはふさわしい。八条以南についても、近鉄の
 高架化によって流路上の線路が無くなったのですから、これを開

渠として整備すれば、西本願寺と東寺を結ぶ散歩道として住民の憩いの場となるのではないのでしょうか。

松下烏石が住んだ「下魚棚堀川角」（『平安人物志』）から少し西に、西教寺（下魚棚通堀川西入下魚棚四丁目）があります。浄土真宗本願寺派。京都市による駒札には、次のように説明があります。

指方山しほうざんと号し、浄土真宗本願寺派に属する。（中略）恵海めいかいは明暦二年に岡山岡山の光清寺の住職となるが、時の藩主池田候より弾圧を受けたが屈せず、かえって諫鼓集かんこしゅう二巻を著して反省を求めたため一時投獄された。このことを知った本願寺十四世寂如上じやくじやうじやう人の申し入れにより寛文十年（一六七〇）に帰京した後、本山の仏堂執事に抜擢され、延宝二年（一六七四）西六条に一寺を与えられた。

西教寺はその後現在地に移転したが、寺宝の中には宗祖親鸞聖人の尊骨、真影を始め、本山からの受領品を数多く蔵している。

なおこの地は明治維新の功臣松井中務なかつかさ（本願寺寺臣）の殉難の地として知られている。

松井中務は、文久三年（一八六三年）八月十二日に自宅で尊攘派浪士に襲われ、翌日、その首が三条大橋に晒されました。通説では、襲われたのは、若宮通花屋町下ルの自宅であったといいますが、駒札の説は面白いので、根拠を知りたいものです。

粟島堂・宗徳寺

芹根水の碑のあるところから南一筋目、塩小路通を西へ向かいますと、南側に町名看板「塩小路通堀川西入志水町」③があります。



塩小路通 堀川 西入 志水町 ③

町名看板③の斜め向かいには、粟島堂宗徳寺（岩上通塩小路上ル三軒替地町）。通称「あわしまさん」。岩上通を南下した場合には、山門前に「粟島堂」の石標（灯籠）。側面には、親切にも「あ八志まだう」と、振りがなが彫ってありました。一方、塩小路通から訪ねると、塀の上に「人形供養」の大看板。その南の門の前には、「婦人守護 諸病平癒 祈願 粟島堂」いう門標があり、その側面には「男女腰より下一切諸病平癒」。門の柱には「粟嶋明神」の門札。惹き文句は「女性一生の守護神」。

宗徳寺の由緒書では、「応永年間（一三九四～一四二七）に行阿上人が開き、本尊は阿弥陀如来。西山浄土宗。宝徳年間（一四四九～一四五二）に、南慶和尚が紀州淡島にて虚空蔵菩薩像を感得せられて上洛の途中、俄かにこのあたりで重くなったのを、ご神意として、鎮守粟嶋明神として祀ったのが始まり」としています。



粟島堂（宗徳寺）山門



粟島堂本堂

紀州の淡島神社の祭神は、医薬祖神といわれる少彦名命。医薬に關係あることから、婦人病平癒にご利益があるといわれるようになりました。粟島堂の粟島明神も、同様のご利益をうたっています。人形供養もおこなっており、奉納された和洋の人形が並べられた収納庫があります。

『都名所図会』では、「粟嶋社」として説明しており、「堀川の西生酢屋橋通の南宗徳寺の内にあり、紀州粟嶋の勧請なり。祭は三月三日」となっています。「ご利益のもととは鎮守の粟島神社だったのを、明治初めの神仏分離令のときに、宗徳寺のお堂の一つに改め、粟島堂と称するようになった」といいます。

蕪村と粟島堂

粟島堂の境内には、娘の病氣平癒を祈ったという、与謝蕪村の句碑が建っています。

粟島へはだし参りや春の雨 蕪村

与謝蕪村『蕪村自筆俳句帳』七二
尾形仂編著、筑摩書房、一九七四

「はだし参り」とは、「ご利益を願って、はだして神仏に参拝することです。お百度参りをするのが、多かったようです。この句で、はだし参りをおこなっているのは、蕪村自身でしょうか。それとも、はだし参りをしている女性を詠んだものでしょうか。わたしが粟島堂を訪ねた日は、春雨ではありませんが、雨の日でした。山門を撮った写真でわかるようには、参道の石畳が雨にぬれています。そこで、蕪村に和して、駄作を一句。

粟島に無事をつたへて冬の雨 艸蟲齋

蕪村は結婚が遅く、歳をとってからできた娘を大変にかわいがっていて、門人などへの手紙に、娘の病氣のことが時々でてきます。一鼠（大坂在住の墨師）宛、安永五年四月三日付の書簡では、自分の病氣のこと、墨を贈られたことの礼、一鼠の病氣見舞を述べたあと、娘の病氣について次のように記しています。

（前略）東福・泉涌寺之開帳もおもひ之外さび（し）
く、流行之風邪麻疹之障碍と被存候。手前むすめ儀、はしかおもく候て、老心をいたため候所、仕合と快氣を得候



蕪村句碑（粟嶋へはだしまるりや春の雨）

て、大慶仕候。（後略）

与謝蕪村『蕪村書簡集』岩波文庫 30-210-2
大谷篤蔵、藤田真一校注、岩波書店、一九九二

霞夫宛、安永五年四月十五日付の書簡では、自分の病氣平癒を述べたあと、娘の病氣を報告しています。

（前略）むすめ事、二月中より左右之腕たるくいたみ候て、今にしかく無之、老心をいたため候。御憐察可被下候。併、氣遣なる病氣にては無之由医師被申候ゆへ、安心いたし候。（後略）

与謝蕪村『蕪村書簡集』岩波文庫 30-210-2
大谷篤蔵、藤田真一校注、岩波書店、一九九二

このような手紙を背景にして、「粟嶋へ」の句を読み直すと、一層理解が深まるような気がします。

猪熊通

粟島堂のある岩上通の一筋西、南北の通りは、猪熊通いのくまといえます。上述の竜谷大学大宮学舎から、南に延びています。この通りは、南下すると、JR線をくぐるガードがあって、八条通のほうへ抜けることができます。さらに進み、東寺道にでて、これを西に曲がると、東寺の門前に出ます。

西本願寺から東寺まで歩くのは、大宮通を南下するのがわかりやすいのですが、この猪熊通を南下するには密かな楽しみがあります。猪熊通を八条通から一筋さがった通りの西へ入ったところに、和菓子屋「都堂」。薯蕷饅頭じょうとうや季節の和菓子。さらに猪熊通と東寺道の十字路、西南かどに「東寺鳴海餅」。「みな月」が有名。東寺道を大宮通まで歩くと、「東寺餅」。この付近は、別の回にさらに紹介することにしましょう。

おっと、町名看板もわすれてはいけません。JRのガードをくぐる前に一枚、「猪熊通塩小路下ル西入上夷町」④があります。この住宅街の東には、タキイ種苗、園芸ファンなら、多分聞いたことがあるでしょう。東のサカタと並ぶ大手の種屋です。



猪熊通いのくまとおり 塩小路しおこうじ 下ルさが 西入にしいる 上夷町かみえびすちよう ④

尾崎放哉と三哲竜岸寺

猪熊通を塩小路通（三哲通）まで戻つて、西に進むと、黒門通との十字路北西に、竜岸寺（龍岸寺）（塩小路通大宮東入八条坊門町）があります。南西は、梅逕中学校の敷地です。この寺の開祖三哲が三哲通の由来となったことは、上述の通りです。町名の「八条坊門町」は、今の塩小路通がかつて「八条坊門小路」と呼ばれていたことの名残。

竜岸寺といえば、一時、自由律俳句の尾崎放哉（一八八五―一九二六）が、寺男として住み込んでいたことが、句集『大空』（死後、荻原井泉水により編集）の巻末に付された井泉水の小文からわかります。

放哉の事

井泉水

（前略）彼は常照院を追はれて、須磨寺に行き、須磨寺を出されて（之は酒の上ではなく寺内の葛藤のみぎぞへを食ふたといふ訳）、小浜の常高寺に赴き、小浜では和尚の借金の弁疏係をしてゐたがお寺其物が経済的に破

綻したので、彼も居たゞまれずに京都に戻つて来た。私の京都の寓居に暫くゴロ／＼してゐたのは其頃である。彼はやはり寺の下男がいゝとて、三哲の龍岸寺といふ寺へ行つたが、その和尚とは性格的に全く合はないので、又飛出して来た。さうした流転生活の初まりは、四条で酒を飲んだ事（私が、まあ今夜はよからうと飲ましたといつていゝかもしれない）に因を發するとすると、私も大に責任を感じなければならぬ訳である。（後略）

尾崎放哉『俳句集 大空』荻原井泉水輯、春秋社、一九二六

<http://www.j-texts.com/taisho/ozora.html>

この句集には、放哉から井泉水へ宛てた葉書も掲載されています。文面からは、きつい肉体労働に音を上げていることがうかがえます。多分、持病も進行していたのでしょう。

六 「八月一日、京都三哲、竜岸寺より」（葉書）

淋シイ処デモヨイカラ、番人ガシタイ。

近所ノ子供ニ読書ヤ英語デモ教ヘテ、タバコ代位モラ

ヒタイ。

○小サイ庵デヨイ。

ソレカラ、スグ、ソバニ海ガアルト、尤ヨイ

濟ミマセンガ、タノミマス、今、十二時ヲ打ツタ処、朝

五時カラ、身体ノウゴキ通シテ、手足ガ痛ミマス、ヤリ

キレ申サズ候

第二信 コレカラ寝マス。

尾崎放哉『俳句集 大空』荻原井泉水輯、春秋社、一九二六

<http://www.j-texts.com/taiشو/ozora.html>

同じ句集から、放哉の俳句を引用しましょう。鉛筆をけずるのは、作句の準備でしょうか。

心をまとめる鉛筆とがらす 放哉
色鉛筆の青い色をひっそりけつて居る 放哉

塩小路通と黒門町通の十字路から北上したところに、町名看板

「黒門通木津屋橋下ル下糺屋町」⑤があります。



黒門通 木津屋橋 下ル 下糺屋町 ⑤

今回の締めくくりは、和菓子屋「七福堂老舗」（大宮通七条下ル上之町）。大宮通木津屋橋通の交差点から北へすこしあがったところ。名物の史跡菓子「梅が枝餅」は、「梅ヶ枝の手水鉢」にちなむ菓子。小梅が丸々一個餡の中に入っています。

大宮通と木津屋橋通の交差点の南西の方向は、広大な梅小路公園が広がっています。大宮通は、ここからJRの線路を跨ぐ陸橋



梅が枝餅（七福堂）

の登り坂になります。南の先には東寺五重塔の先端が見えます。



プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（<http://xyntex.com>）を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第16回）2008/09/30

2009/01/11 公開用

© 2007, 2008, 2009 藤田眞作 <http://xyntex.com>

